

1971年版

推理小説代表作選集

中
山
本
館
蔵

1971＝推理小説年鑑

The mystery annual of



日本推理作家協会編
講談社



1971年版 推理小説年鑑
推理小説代表作選集 定価980円

昭和46年4月20日 第1刷発行

編者 日本推理作家協会

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話東京(945) 1111 振替(東京) 3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本はおとりかいたします

0093-145138-2253 (0) (文2)

1971年版 推理小説年鑑

推理小説代表作選集〈目次〉

序・	5
男一匹・	9
水難の相あり・	23
黄色い吸血鬼・	49
闇の中の子供・	71
大使、夫人、誘拐事件・	105
小梅富士・	131
企業特訓殺人事件・	149
佐野 洋	
都筑道夫	
森村誠一	
鮎川哲也	
戸川昌子	
小松左京	
松本清張	
生島治郎	

海からの招待状	・ ・ ・ ・ ・	笹沢左保
淫らな証人	・ ・ ・ ・ ・	土屋隆夫
たそがれ	・ ・ ・ ・ ・	星新一
古印譚	・ ・ ・ ・ ・	陳舜臣
奇妙な被告	・ ・ ・ ・ ・	松本清張
汚れた刑事	・ ・ ・ ・ ・	結城昌治
たった一人の鉦山	・ ・ ・ ・ ・	草野唯雄
不道德な天使	・ ・ ・ ・ ・	三好徹
311	291	265
239	217	211
191	169	

推理小説界展望・・・・・・・・大内茂男 342

SF界1970・・・・・・・・石川喬司 345

1970年度作品目録・・・・・・・・中島河太郎 348

受賞リスト・・・・・・・・ 375

装幀 細谷 巖

序

日本推理作家協会理事長

松本 清張

日本の推理小説は、世界の、とくに英米のものと比較して遜色がないばかりか、それよりもすぐれているという評を聞く。これはほめすぎかもしれないが、まんざらお世辞だけでもないような気もする。日米の推理小説は芸がこまかい。取材範囲もバラエティに富んでいる。こういう年鑑にして作品をならべてみると、それがよく分る。

推理小説の場合は、とくに言葉の障害を感じる。もし、日本語が、英語なみとはいえないまでも、せめてフランス語かドイツ語のように世界の読みやすい言葉だったら、あるいは欧米の読書界にもブームをまき起しているかもしれない。読者は自由に日本の著作の選択ができるからである。現在だと、まず外国語版に翻訳・出版という狭き門をくぐらねば

ならない。それがきわめて稀な機会なのである。日本語の不自由さという点で、推理小説はもつとも不運な目に遇っているといえる。

推理小説が読書界に定着した、堅実なブームであることに今年も変りはない。ジャーナリズムには推理小説の需要が欠かせぬものとなっている。そこから新人輩出の最近の傾向が見られる。作家は飽くまでも個の作業だが、ふしぎなもので、有力な新人が出ると、必ずといっていいほど同僚の随伴があるようである。それが外からは一種の文学運動にもなって見える。そこに新しい波の興隆と活況が生じる。

推理小説の現象面では流行の変化はあっても、根本的にはあまり変らぬようである。それこそ意匠はさまざまあつてよいので、今後も新しいものが出てくるだろう。が、日本人の好みとしては、やはり英国型のケレン味のないものが根底にあるのが迎えられるようである。これはわたしの感想だが。

1971年版 推理小說年鑑
推理小說代表作選集

男

一

匹

生

島

治

郎

凍てついた闇をふるわせて、自動車の警笛の音が二度、重々しく鳴った。

少年はその音を耳にすると、布団の中ではと身を硬くした。こごえそうな寒さにもかかわらず、掌にじっとり汗がにじみだしてくる。息をつめ、彼は隣に布団を並べている母親の方をうかがった。向うに顔を向けているので表情はわからないが、母親は静かな寝息をたてているように思えた。布団の中で寝衣をすばやく脱ぎすてると、少年はそろそろと右手を伸ばし、枕元にあったズボンとセーターをひきこんだ。ズボンをはき、セーターをかぶる——その動作を彼は母親の方をうかがいながら、慎重にやった。着終った時には、身体中が汗に濡れていた。ほっと一息吐き、少年は起きあがった。そこは六畳一間きりのせま苦しい安アパートの一室だった。出口へ辿りつくまでには、母親の布団のすそをまわっていかねばならない。

足音をしのばせ、彼は出口に向った。扉の横の壁に打ちつけてある釘から、色あせた黒い革のジャンパーをつかみとろうとした時、背後から声がした。

「雅。どこへ行くんだい？」

少年はふりかえった。上半身を起した母親がじっとこっ

ちをみつめている。干しかためたような色の黒い小さな顔に白く光る母親の眼を見下ろした少年の表情にふてぶてさがひろがっていった。

「どこへ行くこうとおれの勝手じゃねえか……」

袖を通さず、ジャンパーを肩にひっかけながら、彼は云った。

「おれだって、もう一人前だ。いちいち母さんに断わらなくても夜遊びぐらいしたっていいだろう」

「おまえは一人前なんかじゃありゃしない」

母親はびしりと云い返した。

「自分ではそのつもりでも、ことの良し悪しを決められやしない甘えん坊だ。そのことはあたしが一番よく知っている。雅、近頃、おまえは変だよ。わるい友達とつきあっているんじゃないだろうね？」

「うるせえな」

少年は眉をしかめた。

「おれが誰とつきあおうと大きなお世話だ。おれはおれの好きなやつらとつきあう。母さんにあれこれ口出しされるのはもううんざりだよ」

「へえ……」

母親はまばたきもせず、まっすぐに少年の方をみつめた。

「ずいぶんえらくなつたものだね、おまえも……。いつから、母さんにそんなことが云えるようになったんだい？」

雅、あたしはおまえを、自分の手ひとつで十八年間育ててきたんだよ。父さんがいなくなってからというもの……」

「わかった。わかったよ」

少年ははげしく首をふった。

「いつでもそれだ。おれを十八年間、育ててやった。女手ひとつで苦勞のしどおしだった。大したもんだよ、母さんは。そのあげくに、おれをこんな安アパートに閉じこめておこうというのか……。え？　こんなうす汚ないところで生きていたってなになるんだい？　いやだね、おれは……。真平だ。おれはもっとでっかいことをやるんだ。男らしいでっかいことをよ。そして、こんなじめついたところからぬけだしてやるのさ」

「そっくりだね……」

つぶやいて、母親は眼を閉じた。四十代の女とは思えないほどしわだらけの陽に灼けた頬を涙がつたわった。

「おまえの父さんもそう云った。十八年前のことだ。そして、おまえがお腹にいるあたしを置いて、出ていってしまった。あの人はヤクザの仲間入りしてしまっただ。太腿に男一匹という彫りものなんかしていたが、あの人は男なんかじゃなかった。人間の屑だった。あたしはおまえに、あんな屑にだけはなってもらいたくない」

「いいかい、母さん」

少年は大人びた表情をつくり、自分に云いきかせるように声をひそめた。

「おれは母さんを捨てやしねえ。母さんにこんなじめめな暮らしをさせたくねえんだ。今に、あれがあのお男のおふくろだってみんなに頭を下げさせるような人間になってみせる。そうなるにはチャンスが必要だ。そうだろう？　え？

おれはそいつを拾うんだ。チャンスをものにすれば、おれだってのしあがれる。広いマンションや、車、うまい料理……。母さんが日やといに出ていくことはもうないんだ」

「世間はそんなに甘いものじゃないのさ」

母親は衰しげに首をふった。

「いっぺんに大きなことをやろうとすると、必ず失敗する。おまえはまだ若いからわからないだろうけれど、地道にこつこつかせいでいくのが一番だよ。あんたの父さんだって、今はきつと失敗してはじめな思っているにちがいない。だから、帰るにも帰れないのさ」

「おやじのことなんか知っちゃいねえ」

少年は唇をふるわせた。

「おれはおやじの真似をしているわけじゃねえ。おれは——そう。おれはおれなんだ」

「そうじゃない」

母親の言葉は暗い呪咀がこもっているようにさえ聞えた。

「おまえは父さんそっくりなのさ。おまえには父さんと同じ血が流れている……」

もう一度、警笛が重々しく闇をふるわせた。

少年は顔をあげた。

「おれ、行かなくちゃならねえ」

ぱっと扉をひき開けると少年は廊下へ消えた。

母親は黙ったまま、身じろぎもせず、少年が出ていった扉口をみつめていた。

木造アパートの前につややかに光った鋼鉄色のセダンが駐^まっていた。窓の中は暗く、運転席にボツンと赤い煙草の火が見える。

少年は運転席に走り寄った。コツコツとガラスをたたき、おびえたように云う。

「おれだよ、兄貴……」

窓は音もなく開いた。口の端に煙草をくわえたものの憂^{うれ}うな表情の男が少年の方に顎^{あご}をしゃくった。

「助手席の方へまわんな」

ほとんど聞きとれないほどの声だった。

少年は助手席の方へまわり、扉を開けて乗りこんだ。車の中は暖かく、むれた革の匂^{にお}いがこもっていた。少年は新鮮な空気でも吸うようにその匂^{にお}いを吸いこんだ。革の匂^{にお}いは車の座席と男の着ているカーコートから匂^{にお}ってくる。しぶい枯葉色のスウェードのコートだった。少年は羨^{うらや}ましそうにそのコートをみつめた。

「兄貴はおしゃれだなあ。そんなコートはあつらえてつく

るのかい？」

「つまりねえことを云うんじゃねえ」

男がノックラッチのギアをドライヴにセットすると、車はすべるようにスタートした。

→今度の仕事さえうまくやりさえすりゃ、おめえだって、いい顔になれる。組内でいい顔になるってことは、銭になるってことだ。こんなコートなんぞ、くさるほど買えるぜ。だから、今は、おめえは自分のやる仕事のことさえ考えていりゃいいんだ」

「わかってるよ」

少年は真剣な顔でうなずいた。

「おれはへまはやらねえ」

「そうみこんだから、おれも組長^{おとこ}におめえにやらせるよう口を利いてやったのさ」

男は短くなった煙草を窓外に捨てると、すぐにまた新しい煙草をくわえた。

「うちの組にも若え衆は勢^{いき}いるが、こんな仕事をやるような度胸のあるやつは、そうたんとはいねえ。おめえは願^{ねが}ってもないチャンスを与えられているんだ。しくじっておれの顔をつぶしてくれるなよ」

「大丈夫だ」

少年は汗ばんだ両手をこすり合せた。

「兄貴にはすまねえと思^{おも}っている。恩^{おん}にきるよ。いずれ、一人前になったら礼^{れい}はさせてもらうぜ」

「ふふん」

男は鼻先で笑った。

「仕事の前には誰だってでかい口はたたける。ところが、いざ相手と向いあうと、ブルっちまうんだ。特に今度の相手は大物だ。おめえみたいなチンピラとは貫禄がちがう。貫禄負けしてまごついていると、逆に料理されてしまふぜ」

「おれはちがう。怖かねえ」

少年は乾いた唇を舌の先でなめた。

「自信があるんだ。こうと決めたことは今までも必ずやってきた。どんなデカイ相手でもブルったことはない」

「おめえがあんまりイキがるから、こっちはかえって心配になるのさ。チンピラ同士の犬コロのじゃれあいみたいな喧嘩とはわけがちがうんだ。人間一人を殺す仕事だぜ」

男は煙草の煙を吸いこむと、首をすくめた。

「おれもおめえぐらいの年頃るとき、そんな仕事をしたことがある。それが、おれの若衆頭にまでのしあがる最初のチャンスだった。だから、おめえを見てみると、その時の自分を思いだすのさ。おれは怖かった。無我夢中だった。

気がついたときには、相手が自分の足もとに転がっていた。刑務所でおつとめをしているときも、そのことを夢にみて、何度も夜中にとびあがったもんだ。殺した相手が夢に出てくるっていうが、おれの殺した相手なんかどうとも思っかねえ。死体になったやつなんか怖いもんか。それよりも、相手と向いあった瞬間が怖いんだ。そのときのこと

を思いだすと、冷汗がでるぜ」

少年は黙っていた。

それを横目で見ながら、男は話をつづけた。

「いいか、やめるんなら今のうちだぜ。今なら、まだやめられる。当分、三下で使い走りをして、他人に頭を下げなくちゃならねえが気は楽だ。ただイキがって、しくじられたんじゃ、モトもコもねえ。どうだ？ やめるか？ このまま車をおめえのアパートまでもどせばそれでいいこった。組長には、おめえがやめにしたと云つていてやる」

「いや、やめねえ」

ふるえながらも、少年はきっぱり云った。

「おれは学校もロクに出てねえし、腕に技術もねえ。この世界で大物になるしか道はねえんだ。とすれば、このチャンスをするわけにはいかねえ。そうだろ？ 兄貴。たしかに、兄貴の云うとおりだ。おれは怖い、怖いとも。ガタブルだ。しかし、おれはやってみせる。ヘマはやらねえ。兄貴、やらせてくれ……」

「わかった」

男は大きくうなずいた。

「そこまで腹が決っているなら、やってみる」

二人はそのまましばらく黙りこんだ。

車は住宅街の中へ入り、鉄筋コンクリート三階建の邸の前に停った。そのどっしりした建物は他の住宅を圧して、夜目にも白く、小さな要塞を思わせた。

「着いたぜ」

男は云って、少年の方をふりかえった。

「もうひとつ訊いておくが、おめえ、この仕事のことを誰かにしゃべってねえだらうな？」

「いいや、しゃべりゃしねえ」

少年はあわててかぶりをふった。

「しゃべるわけがねえじゃねえか……」

「ま、いい。おめえはいったい誰をどうやるのか教えてもらっていいえんだから、詳しいことはしゃべりようがない。ただ、おめえの肉親か恋人でも心配して、私立探偵でも尾けられたら、仕事をするのがやっかいになる」

男の眼が細められ、急にけわしくなった。

「おめえ、アパートから出てくるのがバカに遅かったな。

合図では、二回警笛を鳴らせば出てくるはずだった。おれは十分待って、もう一度鳴らした。その十分の間、なにをしていた？」

「すまねえ」

男の眼に射すくめられたように、少年は身体をちぢめた。

「おふくろが夜遊びに行くとか何とか、ぎゃあぎゃあ云いやがったんだ」

「ほんとに、それだけか？」

「ほんとに、それだけさ」

「そうか……」

うなずいて、男はまた新しい煙草に火を点けた。

「女ってものはいつても男の仕事の邪魔をしたがるもんだ。やつらには、男の仕事ってものがわからない。それで、女の云いなりになっていたひにゃ、いつまでたってもいっちょ前の男にはなれねえのさ……」

「そうとも」

少年は微笑した。

「おれもそのことをしよっちゅうおふくろに云いきかせるんだが、わかってもらえねえ」

そして、大人びた溜息を吐いてみせた。

男は玄関に近づくと、チャイムを鳴らした。柔らかなチャイムの音がこの白いどっしりした邸の中にひろがっていくのが聞えた。

扉には、一枚の鏡が取りつけてある。マジックミラーにちがいはなかった。

扉が開き、見あげるような大男が二人の前に立っていた。大男の顔にはありとあらゆる古い傷痕がぎざまれている。

「これはいるかい？」

男は大男に親指を示した。

「待ってますよ」

大男は答えて、玄関の真向いにある扉を指さした。